

## 「バランスのある人」

李じょんみ（イ・ジョンミ）

1. 動機
2. 対話まで 仁について
3. 仁との対話
- 3-1. シーソーの上で
- 3-2. 丸いボールの上で
4. 結論
5. おわりに

### 1. 動機

大学院の授業で「5年後の私」というテーマで活動をしたことがある。5年後になりたい自分をイメージし、それに似合いそうなキャッチフレーズをつくるのがその活動の目標であった。「何かになりたい！」という将来有望な計画を特に持っていなかった私は「いつか「空を飛んでみたい」という一生の夢は持っているが「私って何を目指しているんだろう」と考え始めた。それでも思いつくことができなかった私は、「じゃあ、今の生活の中で私は何を気にしているなんだろう」と今の生活を振り返ってみることにした。そうすると頭の中に「バランス」ということばが思い浮かんだ。あまり口には出していないけど確かここ何年「バランス」を気にしながら生活していることに気がついた。食べ物のバランス、体のバランス、心のバランス等…その活動で私が出したキャッチフレーズは「バランスのある人」であった。「バランス」というのがどのようなものなのかは分からなかったが、おそらくこれからもずっと頭のかたすみに「バランス」ということばを意識しながら生きていくのだろうという気がしたからである。

そして私はどうして自分が「バランス」ということばにこだわりを持っているのだろうと疑問を持ち始めた。少なくとも物理的なことだけを指しているのではないだろうなあと漠然と考えた私は、その疑問を解決すべく、今回の対話に挑んだのだ。

## 2. 対話まで

どうして私は「バランス」ということばにこだわりをもっているのだろう、という問いに答えるため、自分の過去から何か見つけることができるのではないかと思った私は自分の過去を探ることにした。

そこで対話相手に選んだのは妹の「仁」である。仁は年子であることや外見・内面が私よりしっかりしていること、社会経験が私より長いことなど、妹よりも「ともだち」に近い存在である。そんな仁を対話相手に決めた大きな理由は、私にとって彼女は「もうひとりの自分」だからである。それぞれ異なる人でありながらも同じ遺伝子を共有している存在。仁と一緒にいると時々自分のことをみているような気分になるときがある。仁なら私の過去も知っているし、仁と対話することによって自分の何かが発見できるのではないかと思い、仁との対話に挑んだ。

対話にあたりいくつかの不安もあった。一つは母語で行われた対話をどれほど日本語で忠実に翻訳できるかということである。ことばのひとつひとつ丁寧に翻訳するのも大切だが、それと同様、対話の全体の雰囲気を活かすことも大切だと考えている私は、今回の対話では雰囲気を活かすことに重点を置くことにした。もうひとつの不安は、仁と対話まで至るかどうかということだった。普段めったに改まったことを話すことのない仁と果たして深い話ができるのだろうか。もしかしたらお互い照れくさくて話せないかも知れない。といった不安もありずっと対話を後回しにしていたが、「このままじゃレポートが書けない！」と思い、思い切って対話を持ちかけたのである。

## 3. 仁との対話

- ・2008年11月30日(日)、23:10~24:50(1時間40分)
- ・それぞれの部屋でウェブカメラによる映像チャット
- ・対話は韓国語で実施
- ・私:美、 妹:仁

### 3-1. 親とのバランス

美:このテーマを決めた動機を探してみたら、やっぱり最初の出発点はダイエットとすごく関係があると思うの。ダイエットで体のバランスはよくなったけど心は神経質になったり結構乱れていた

と思うんだ。

仁: 当時は気付かなかったけど、今振り返ってみたら当時の自分の考えがよくなかったと思っただけ？

美: うん

仁: 振り返ってみて、今までの人生の中で一番自分が嫌だったのがあのときの自分？

美: 一番というか…うん、そうだね

仁: すごく努力した時期だったのにそれに比べ結果がよくなかったと思っているんじゃないの？

美: …かなあ…

私たちは対話を始めた。私はまず自分のテーマを説明し、自分で思っていたきっかけを話した。私は「バランス」を考えるきっかけになったのが「ダイエット」だと思っていた。「ダイエット」を自分の生活に取り入れながらずっと体との付き合い方を突き詰めてきた一方、心との付き合いがうまくいかなかったと。そこで体と心の「バランス」を考え始めたのではないかと考えていると。

最初仁は私の話を理解しようといろいろと彼女なりの「バランス」のイメージを私に聞いてきた。しかし、私自身も「これだ」という確信するものがなかったため、ちゃんと答えることができなかった。そして確かにきっかけは「ダイエット」かもしれないが今は前ほど執着しない自分に気付いた。仁はそれについて私の日本での新しい生活が考え方を変えたのではないかと言った。一理はあると思ったが、それでも私はこのテーマの出発点はダイエットだということを何回も言い続けた。しばらく黙ってた仁はそれ自体に疑問を持つ様子だった。

仁: あのさ、ダイエットへの何かトラウマでもあった？

美: …とくにないね。

仁: 急に激太りしたわけでもないし。むしろやせてから(周りから)いろいろ言われたけど。

美: 私も(ダイエットを始めた)きっかけがわからん。

仁: そんなに衝撃的な出来事があって始めたわけでもなかったよね。

美: 他のところであんな強い意志をみせたこともないのに不思議だわ。

仁: 多分ね…(沈黙)一度得たものを失いたくないという気持ちがあったからかもしれないね。もし

ダイエットをやめたら元に戻るかもしれないという不安？今までの努力が無駄になってしまうんじゃないかという不安があるんだよ。

仁はしばらく考え、上記の意見を述べた。私は仁のことばに意表を突かれすこし顔が赤くなった。表には淡々と平気を装っているけれど、実は自分の中には、「失うことへの恐れ」を持っている。人に気づかれたくないと思っていたところを突っ込まれたときの恥ずかしさ。一方、だからこそ人の手を借りて無理やり引き出そうとしていたかもしれない。不思議なことに、いったんそこに足を踏み入れてからは話が色んな方向に展開してくことになった。

仁: 私はねえちゃんのバランスへの興味はダイエットからというよりも、今の一人での生活を褒めてもらいたいというのも関係あると思うけど・・・、自分が壊れていくところを見せたくないからじゃないかなとも思う。一人でもやっていける、人に心配かけたくないというところから来ているんじゃないかな。その出発点って食べることから始まるでしょ？一人暮らしをしている中でそれについて、より考えてきてるんじゃないかな。

美: でも、前も食生活には気をつけていたよ。

仁: 日本ではねえちゃんが主体じゃん。

美: うん。

仁: 全て自分でやっていかなければいけないじゃん。こっちではお母さんにやってもらったけど日本では全部自分でやっていかなきゃいけないでしょ？

美: そうね

仁: バランスって揺さぶられない芯を持って生きていくって意味かな。しっかりする

私が「バランス」の出発点を「ダイエット」という過去から見つけようとしているのに対して、仁はそれよりも一人暮らしをしている現在から見つけようとしていた。さらに「揺さぶられない芯をもつこと」がバランスなのではないかと彼女なりの定義を出した。そんな彼女のことばを聴いているうちに「うん、確かに」と耳を済ませる自分がいた。

美: あのさ、褒められたいという欲望があるじゃん、私。褒められて伸びる子だし。で、考えてみた

んだけど、私たちってお母さんとお父さんに愛されていないわけでもないのに、なんで褒められることを気にしているんだろうね。

仁: うん…愛されてないわけではないんだけど、褒められてはいなかったかも。今までお父さん、お母さんから勉強しろとも言われたこともないし、強制的に何かをやらされたわけでもないし、一人の人間として愛されて育てられたと思う。まあ、正直私たちも他の人より何か得意とするものがあったわけでもなかったからなあ。私もこれについてはいろいろと考えたことがあるんだ。なんで私って得意としているものが一つもないんだろうって。

美: 褒められていなかった…

仁: 愛されてきたとは違うと思う。私は内気だったから怖くて挑戦できなかったけど、ねえちゃんも私より何かしらいろいろとチャレンジしてたじゃん。あきらめも早かったけど。

美: だから頑張ってたのかあ

なるほど。実は私も以前から「愛されてきたはずなのになんで？」と自分に問い続けたことがあったが、そのときの答えは愛されてきたからこそ、より求めているのだと考えていた。私が両親の—とくに父親の—の愛に気付いたのは私が成人になってからであって、それも「振り返ってみたら」いろんなところに愛があることに気付いたのだ。けれども成長期—とくに思春期—なんかはリアルタイムで「愛」を感じることは少なかったのだ。ということは私の「バランス」の出発点は「親」と「自分」との関係から始まったかも知れない。私は仁の話聞いて何か心が楽になったような気がした。

### 3-2. 人とのバランス

仁: お母さんもお父さんも感情表現が豊かな人たちでもなかったし、世代的にも今の親とは違うじゃん。個人を大切にした家族だし。だから、バランスの焦点はダイエットではないと思うな。褒められたいというのも性格だろうし。うん…今の生活を守りたいというイメージじゃない？長崎に住んでいたころの自分をパワーアップした形の。

美: あのときは辛かったなあ。

仁: 私が見ても(ねえちゃんも)当時よりは今の方が全然余裕あるもん、生活に。長崎は初めての一人暮らしだったし、1年だけだったし。

美: 自分の生活だけではなく、人との付き合い方もよく分からなかったなあ。

仁: 一人で生活していたじゃない。今は援助してもらってるけど。

美: そうね、学校とバイトばっかしてたね。人との付き合い方もよく分からなかったし。当時は当たり前だと思っていたけれど、振り返ってみたらきつかったなと思うよ。今は人に優しくしたいと思うもん。当時は自分のことではいっぱいいっぱいだったけど。

仁: 当時の反省から。

美: バランスって嫌だったところを補完するってことに近いかな。

仁: それに近いかも。ねえちゃんが一人の人間として生きていくために丸いボールの上で…つまり丸いボールが地球…立派な大人になりたいってことの表れ?…深いね。これ、レポートに書こうよ。

仁はそこでまた環境の変化のことを話し出す。いったん上の対話で「親との関係」について納得した私は、それとつなげて8年前に留学していた長崎のことを振り返った。当時は一人になった不安と、でも状況に負けたくない、留学生生活をしっかりしないと周りから認めてもらえないかもという気持ちが無意識に働き、自分に厳しかったのだ。さらにその厳しさの加減が分からず周りにも厳しくしてしまったことは、今でも反省しているところである。当時と比べれば今は多少自分に余裕を持つようになったし、無意識ながら当時の自分の反省から人に優しくしたいと思うようになったのだ。

ここまでの対話から仁は「丸いボール」という「バランス」のイメージを理解した様子だった。

美: ってことはバランスって心を閉ざしたまま厳しく生きていくということではないね。

仁: 人を踏み台にして生きていくことじゃないってこと(笑)。

美: (笑)

仁: オバマさんのお母さんが言ったんだって。「人の立場になって考えてみるのが大切だ」って。ぐっときたわ。

美: 最近思うんだけど、私が出会う全ての人と本気で向き合うのって難しいなって。

仁: そうだね。歳をとればとるほどね。

美: 人間関係って難しいね。

仁: オバマさんが書いた本を読んでみて(笑)

対話の最後に私は今の自分にとっての「バランス」とは、「心を開き、自分が『自然体』でいて人にも優しくすること」だということに気が付いた。今まで無理していたこと、無理していると自覚はなかったけれど実は無理していたこと。それで「バランス」を崩してしまうこと。一生懸命に「バランス」をとろうとしていたことが反って「バランス」を崩してしまう。

そして対話にはつながらなかったが、今は「人間関係」のことで自分が「バランス」を取ろうとしていることに気が付いた。過去から現在までつながったところで仁との対話は終わった。

#### 4. 結論

「なんでバランスを気にしているんだろう」という問いに、最初は「自分」の中で何かの答えを見つけようとしていた。しかし対話が進んでいくうちに、気付いていなかったけれど「親」との関係も自分に大きい影響を与え、親から離れている今は「人」との関係の中で悩んでいる自分に気が付いた。

「ダイエット」、「人間関係」と対象はいろいろあったけれど、その核にあるのは対象との「バランス」だったのではないかと思う。最初は「ダイエット」という自分とのバランスを気にしていたので、シーソーの上に乗っているようなイメージだった。それが少し広がり今は丸いボールの上に乗っているようなイメージに変わってきた。何が起こるかわからない環境という丸いボールの上に乗っている私は常にバランスをとらなければならない。丸いボールの上でバランスをとるためには力を抜くことが大切で、自分が「自然体」でいられることにつながると思う。そしてボールの動きに身を任せ、ころころと転んでいくこと。それが私にとっての「バランス」である。

#### 5. おわりに（今回の活動を通して考えたこと）

2009年1月23日。「考える日本語7-8」の活動が全て終わった。この日は1-4限まで授業が入っていてとても疲れていた。夜11時、家に帰り、お風呂に入る前になぜか気になった私は、カバンの中からこのレポートを取り出し、改めて読んだ。読んでいたらいきなり涙が出てきた。その涙は次第に泣きが変わり、ついに大声をだして号泣してしまった。涙は止まらず、このまま呼吸ができなくなるのではないかと思うほど泣き崩れた。

私は今回の活動がとても苦しかったのだ。テーマを選ぶ、対話をする、レポートを書く、

相互自己評価をする。という一連の作業としてはそんなに苦しくはなかった。教室のだれかが「そのテーマ面白い」と言ってもらえとても嬉しかったし、もっといいものを書きたいと思った。作業としては淡々とこなした。しかし、完成したレポートはいつの間に「私」となっていた。そこに「私」がいた。形のない「私」が活字という形のあるものになり、その形のある「私」と私が向き合った瞬間、ショックを受けてしまったのだ。そして気付く。「苦しかったんだろうなあ」と。いくら腹をくくってやったとはいえ、苦しかったんだと。また改めて自分に気付く。

今回の活動でみんなのレポートを読んで少しみんなのことが分かったような気がする。多分、誰かは私のレポートを読んで私について分かってもらえたかもしれない。今までは集まった人たちで何か作っていくことでいろんなことが見られる活動が多かったが、今回はそれぞれが持っているものを見せ合うことから何か始まったような気がした。そういう意味ではこれからもっと楽しくなりそうなところで活動が終わってしまうのがもったいないと思う。